

インテリジェントデザイン論は最近、新聞で取り上げられることもあるが、日本の場合どちらかというところダーウィニズムに対抗するアメリカ独特のキリスト教的風土の産物として批判的に照会されていることが多いと思う。これは、日本の社会がダーウィニズム的な考えを無条件に受け入れているため、実際、自然界が自己完結的に現在の世界に至ったとする見方に、あえて異を唱える人たちは非常に少ないように思える。おそらく霊界を漠然と信ずる人でさえ、この宇宙が神によって創造されたと考える人は少ないであろう。しかし、統一思想を真理とみる私たちからすると、自然主義的傾向が蔓延する現代社会に対抗する一つの力強い武器になるのではないかと期待する面がある。すなわち、統一思想は被造世界の神による創造を明確に定義しており、インテリジェントデザイン論も、宇宙、そして地球や人間の神による創造の可能性を示唆しようとしている。神 → 宇宙 → 人 という方向はどちらも同じである。

一方、日本人は神の存在に対しては無関心であることが多いが、霊界に対しては必ずしもそうではない。テレビを見ても霊現象を扱った番組や霊能力者による事件解決などといった番組が組まれ、人々の霊界に対する関心が高いことを示している。特に、天外伺朗氏による「ここまで来たあの世の科学」や「未来を開くあの世の科学」は、霊界と地上世界との間に科学的な類推が可能としている点で興味ある著書である。天外氏による霊界と地上界は一体不可分であるという論理は、統一思想における無形実態世界と有形実態世界との二重世界と合い通じるものがある。しかし、ここでは決して宇宙意思や神による創造という面については、踏み込んで考察してはいない。

ところで、統一思想の四位基台は時間性から見ると絶対—相対—中和という正分合作用を通して発展することになっている。この発展形態は、絶対を神あるいは宇宙意思とすれば、相対は無形実態世界と有形実態世界の二性であり、中和体は被造世界である。したがって、このような関係から見れば、インテリジェントデザイン論は神 ⇔ 被造世界という縦的關係があることを論じたものと見ることができる。それに対し、天外氏のいう「あの世」と「この世」との関係は、無形実態世界 ⇔ 有形実態世界との横的關係のあることを論じたものと見ることができる。このような取り組みが、現在明らかになっている科学的な観点から行われていることは、まさに新しい時代の幕開けを示唆しているのかもしれない。しかし、いずれの場合も自然主義に対抗する一つの提案であり、仮定にとどまっている。

そこでもう一度、被造世界の創造過程を統一思想の枠組みから見直すと、先に述べた正分合作用は、神の設計された被造世界の実現には、無形実態世界（あの世）と有形実態世界（この世）との相対的關係を通す必要があることを示している。もう少し詳しく述べると、統一思想によれば、すべての力（存在する力、発展する力など）は授受作用によって生ずる。したがって、事物が存在するためには2つの相対的關係にあるものが相互作用しなければならない。これは、すべてのものは自己完結的ではなくもう1つの相対物を必要としており、しかもそれらが互いに関係しなければならないことを意味している。このような観点から見ると、インテリジェントデザイン論は、あの世の科学を取り込み、無形実態世界との関係にまで踏み込むときに、神により創造された被造世界という見方をもっと決定的に示すことができるように思える。